歌垣の現場性と万葉恋歌の観念性
—証人としての他者と「人目」「人言」

工藤　隆

1　生きている歌垣からモデルを作る

『万葉集』には、「相聞」だけでなく「雑歌」そのほかにも恋歌系統の歌が多い。また「挽歌」も、慕う対象が亡き人だという点を除けば相手を恋い慕うという点では表現形式自体が恋歌のそれと通じているので、短歌の挽歌の場合は恋歌と見分けのつきにくいものがある。したがって、万葉歌全4516首のうちのおそらく半数近くが恋歌、あるいは恋歌的なものだとしていい。

万葉恋歌と言えば直ちに「歌垣」との関連が思い出されるであろう。この歌垣を私は、

> 歌垣とは、不特定多数の男女が配偶者や恋人を得るという実用的な目的のもとに集まり、即興的な歌詞を一定のメロディーに乗せて交わし合う、歌の掛け合いである。

と定義している。この定義に当てはまる歌垣が、近年の現地調査の進展により、主として長江（揚子江）流域の少数民族社会を中心として、アマミ・オキナワ地域を経て日本列島（北海道を除く）にまで及ぶ地域に存在しているか、あるいは過去に存在していて、いわば“歌垣分布圏”を形成していることがわかってきた。

長江流域の南・西部の少数民族社会のほとんどで、歌垣が現に今も行なわれているか、あるいはつい最近まで行なわれていた。ペー（白）族、ナシ（納西）族、イ（彝）族、チベット（蔵）族、ワ（佤）族、ラフ（拉祜）族、リス（傈僳）族、ジンポー（景頗）族、ハニ（哈尼）族、チワン（壮）族、ミャオ（苗）族、ヤオ（瑶）族、プイ（布依）族、タイ（傣）族、シュイ（水）族そのほかと、また、ブータン、ネパールにも歌垣が存在している。

一方で、アフリカ、ヨーロッパ、シベリヤ、アイヌ、インディアン、インディオなどには、歌垣に対応するような「恋の歌掛け」の習俗についての報告がない。また、長江流域の民族が南下した東南アジア地域（タイ・ラオス・ベトナムなど）の少数民族には歌垣があるが、海を隔てたインドネシア地域などには歌垣の報告例がない。

また、朝鮮半島文化では、現在だけでなく古代の資料の中にも私の定義する歌垣の事例がない。現在残っている「カンカンスオルレ」は、女性たち数十人が円陣を作って一人が真ん中で音頭を取り、他の人が声を合わせる形式のものなので、歌垣ではない。『魏志』韓伝に、収穫儀礼などのときの「歌舞飲酒」の記述があるが、そこには私の定義の歌垣に該当するものはない。単なる「歌舞飲酒」なら世界中のどの民族にも存在し、若い男女が「恋歌」を歌うのも世界中どの民族でもありうることであるから、それだけでは歌垣の部類に入れることはできない。したがって、朝鮮半島文化は、私の言う歌垣文化圏からは外れていることになる。

また台湾にも、今までのところ、台湾の先住民族（中国政府の呼び方では「高山族」）に、私の定義する歌垣に類するものがあるという報告はない。

それに対して、『古事記』『日本書紀』や『風土記』『万葉集』には歌垣関係記事が豊富である。したがって、〈古代の古代〉の日本列島民族（ヤマト族）は、長江流域の少数民族と同じく、歌垣文化を共有

する文化帯（歌垣文化圏）の中にあったことになる。

また、アマミ・オキナワ文化には明確に歌垣に類するものがあったし、今もその一部が継承されている（アマミの「歌遊び」、オキナワの「夕遊び＝モーアシビ」など）。

以上のように、長江流域からアマミ・オキナワ地域を経て日本列島に及ぶ歌垣文化圏の存在は、日本古代の『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』の分析にとって無視できないことであろう。〈古代の古代〉の日本列島民族文化と、アマミ・オキナワ地域および長江流域の諸民族との文化的類縁は濃厚なのである。

以上の観点のもとに、本稿では、主として中国雲南省のペー族歌垣の現場資料[1]を素材として、万葉歌の分析を試みることにする。

2　恋愛の諸局面の共通性

どのような民族でも、男女の配偶者選びのときの駆け引きや、恋愛関係に入ったときの感情の動きについては、似たような局面を持つものだ。そういった駆け引きや感情の動きを私は「恋愛の諸局面」と呼ぶが、たとえば、チワン（壮）族の歌垣では、「初会（初めて出会った挨拶）、探情（相手の真情を探る）、賛美、離別、相思、重逢（また会うことを約する）、責備（相手を責める）、熱恋、定情（結婚の約束をする）」（『中国歌謡集成 広西巻（上）』中国社会科学出版社、1992 年）などの恋愛の諸局面があるという。また、雲南省剣川ペー族の歌垣の場合では、ペー族文化研究家の施珍華（シヂェンホア）氏（ペー族）からの聞き書きによれば、「相見（出会いの挨拶）」「催請（歌掛けに誘う）」「賛美（誉めたたえる）」「盤詰（問いただす）」「結交（付き合いをする）」「分別（別れる）」「重会（再び会う約束をする）」「対不堅貞愛情的斥責諷刺（相手の不誠実さを非難し、風刺する）」という、八種類の恋愛諸局面があるという。歌垣の伝統を持つ民族ならどの民族でも、こういった恋愛の諸局面を自在に組み合わせて歌掛けをしているのである[2]。

というわけで、万葉歌の中に中国少数民族の歌垣に見られる恋愛諸局面が存在していることを指摘することは容易である。実際に、このような視点から、万葉歌の中国少数民族の歌垣歌の恋愛諸局面との対応の抽出に力を注ぐ研究もある[3]。このような作業は、『万葉集』の歌の基層が、長江流域から日本列島に延びる歌垣文化圏に所属していたことの確認として、必要である。

万葉歌[4]と中国少数民族の歌垣歌の表現の一致を示す典型的な例を一つ挙げよう。

事（こと）しあらば小泊瀬（をはつせ）山の石城（いはき）にも隠（こも）らば共にな思ひわが背（せ）（巻十六雑歌・3806）

〔もし事が起こって、小泊瀬山の石棺にも隠（こも）ることになったら、いっしょに隠りましょう。だから物思いなさるな、愛しいあなたよ。〕

つまり、同じ墓に入ってもいいくらいにあなたのことを恋い慕っています、という熱愛の様式的表現である。この様式的表現は、『常陸国風土記』（日本古典文学大系）新治郡の、次の歌にも見られる。

言痛（こちた）けばをはつせ山の石城（いわき）にも率（ゐ）て籠（こも）らなむな恋ひそ我妹（わぎも）

〔二人の仲の噂に苦しめられたら、おはつせ山の墓穴に連れて行って一緒に籠もりますから、そんなに恋いこがれないでください。〕

この熱愛の様式的表現が、ペー族の現場の歌垣歌にも出てくる。

〔174 女〕 この話は私の気持ちに添いました
これは私の気持ちに合い、私の気持ちに添います
私は言います、兄のあなたは本当にいい人です
私はほかの人は愛しません
生まれるなら、あなたと同じ所に生まれます
死ぬなら、あなたと同じ墓に入ります ●この「同じ墓に入る」という表現は、同じ 歌垣【A】の〔26 男〕〔64 男〕でも用いられている。
私は愛情ある兄のあなたに言います
あなたを愛していることでは誰にも負けません
（工藤『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』、歌垣【A】）

以上のような、『万葉集』『常陸国風土記』の歌とペー族歌垣歌の表現の共通性は、どちらからどちらかへの影響によるものとする必要はないだろう。恋愛にかかわる感情は、どの時代のどの民族でも同じような諸局面を持つと考えていいのである。もちろん、両者が共に歌垣文化圏という特徴ある文化帯の一角を占めている以上、日本の縄文時代あるいは弥生時代あるいは古墳時代あたりに、実態としての歌垣文化の浸透・交流があり、その痕跡が万葉歌や『常陸国風土記』の歌として記録されたと考えてもいいわけである。

このことは、たとえば、古橋信孝が万葉歌の恋歌から抽出した[5]、「出逢い（名告り、一目惚れ、恋の始まりと歌、人の噂の呪力 etc）」「逢い引きの使（つかい）（女からの誘いと拒否、逢い引きの確認 etc）」「逢い引きの時間（朝の別れ etc）」「逢い引きの場所（父母に知られぬ逢い引き etc）」「恋の通い道（山越えの恋 etc）」「共寝の姿（ひとり寝の枕 etc）」「恋の呪術（逢うための呪術 etc）」「恋の終わり（心変わり・別れ、絶えたる恋、嫉妬に心を焼く、諦め etc）」といった恋愛の諸局面についても言えることである。これらのいくつかは、先に引いたチワン族の歌垣歌の恋愛の諸局面と共通するものを持っている。

3 歌垣歌と万葉歌の水準の違い

このような視点から言えば、中国少数民族の歌垣歌の恋愛諸局面と万葉歌のそれに共通するものがあるのは当たり前なので、現場の歌垣からの万葉歌の分析が、いつまでも両者のそのような類似を指摘する段階にとどまっていてはならないだろう。むしろ重要なのは、現場の歌垣の歌と万葉歌の、歌の水準（抽象度の高低、文学性への傾斜の度合いなど）の違いを明らかにすることによって、〈古代の近代〉の歌集としての『万葉集』の性格を浮上させ、万葉歌を相対化することである。

ペー族の歌垣歌で、万葉歌と共通しつつもしかし万葉歌にはない現場の歌垣ならではの特性を帯びている表現の例を挙げれば、たとえば次のようなものがある。

〔27 女〕愛する人（いとしい人）よ。
私はあなたのために、やっとのことでここまでやって来たのです。
山を越え峰を越えて、私もやって来ました。
すべてはあなたのためです。

山を越え峰を越えることを、私は恐れません。
道がどんなに遠くても私はここまで、
私はあなたのために、やっとのことでたどり着きました。
あなたはどのように言うべきなのでしょう？
〔28 男〕妹よ、あなたがここに来るのは簡単なことではありませんでした。
大変な苦労をして私のために急いで来たのですね。
山を越え峰を越えて、私のためにやって来てくれました。
ありがとう、娘さんたち。
きょうはもう、ばったりとお会いしたのですから、
愛情の深い人（あなた）はつらいなどと思わないでしょう？
妹（あなた）が私と仲良くしようと思うのなら、
百年経っても愛情はさらに深くなります。
〔29 女〕百年経っても一緒に親密にしてくれる、と言うんですね。
私も同じように親密にしたいと強く思っています。
二人が愛し合うのであれば、愛し合いましょう。
いつまでもあなたのおそばにいます。
ほかの人が噂を立てても、私は恐れません。
ほかの人が噂を立てたら、私はますます大胆になります。
私は愛する人と共に行きます、
あなたと一緒に家に帰るのに、なんの妨げがありましょうか。

（工藤『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』、歌垣【A】）

まず「山を越え峰を越えて」という表現について言えば、『万葉集』にも、山を越えて通うと歌うことで、女に対する愛情の深さを表現する、たとえば次のような歌がある。

淡海の海沖つ白波知らねども妹がりといはば七日越え来む（巻十一相聞往来・2435）
〔淡海の海の沖の白波のように家路は知らずとも、愛しいあなたのもとにというなら、七日かかろうとも越えて来よう。〕
夕されば ひぐらし来鳴く生駒山越えてそ吾が来る妹が目を欲り（巻十五遣新羅使人らの歌・3589、秦間満）
〔夕暮になるとひぐらしが来て鳴く生駒山を、越えて私は帰って来る、愛しいあなたに会いたくて。〕
妹に逢はずあらばすべ無み石根踏む生駒の山を越えてそ吾が来る（巻十五同・3590）
〔愛しいあなたに逢わずにいると何もする術ないので、岩石けわしい生駒山を越えて私はやって来た。〕

また「ほかの人が噂を立てても、私は恐れません」という表現では、やはり万葉歌にも、他人の目や噂があっても、それに負けないということを歌うことで、相手に対する愛情の深さを表現するものが多数ある。代表的な 4 例を挙げる。

秋の田の穂向の寄れるかた寄りに君に寄りなな言痛くありとも（巻二相聞・114、但馬王女）

〔秋の田の稲穂が風で一方に片寄ってなびいている。そのようにわたしもあなたにしっかり寄り添いたい、たとえ人の噂がひどくなっても。〕

恋死なむそこも同じそ何せむに人目他言言痛みわがせむ（巻四相聞・748、大伴家持）

〔噂をたてられるのがつらくて逢わずにいると恋の苦しさに死にそうになります。つらさは同じこと、どうして人目や人言をうるさがったりしたのでしょう。〕

人言はまこと言痛くなりぬとも彼処に障らむわれにあらなくに（巻十二相聞往来歌・2886）

〔人の噂がほんとにひどくなったとしても、それを気にするわたしではないのに。〕

人言を繁み言痛み吾妹子に去にし月よりいまだ逢はぬかも（同・2895）

〔人のうわさがうるさく、いろいろ言い立てられるので、私の愛しいあの娘にはまだ逢っていないなあ。〕

「山を越え峰を越えて」も「ほかの人が噂を立てても、私は恐れません」も、いずれも越えがたい障害があってもそれに負けないと宣言することで、愛情の深さを表現する〈様式〉の一つである。

ただし、歌垣【A】が歌われた石宝山歌垣の場合、「山を越え峰を越えて」は〈様式〉であると同時に実態でもある。人々は、周辺数十kmから100数十kmに及ぶ村々から、かつては徒歩だけではるばるとこの山を目指してやって来たのである。

また、「ほかの人が噂を立てても、私は恐れません」という句にも、実際に村の生活の中で生じる、"非難される"といったマイナスの方向性の「噂」が実態として存在している。すなわち現場の歌垣においては、万葉歌との類似の表現でも、その背景には現実性、事実性がしっかり張り付いているのである。

このように、『万葉集』の恋歌には、現場の歌垣歌に現れるさまざまな恋愛の諸局面が見られるのだが、しかし次に述べるように、『万葉集』の「人目」「人言」にあたるものが、現場の歌垣では、マイナスばかりではなくプラスの方向性を持つ場合があるということに注目したい。

4　証人、恋の支援者としての他者

一般に現場の歌垣は、友人や見ず知らずの見物人が複数いる所で、つまりは多数の他人の「目」また「耳」の中で、したがって公開の場で歌われている。ということは、歌垣の場は、社会の中での公認の男女関係を作る場だということになる。万葉歌では、恋愛はひたすら"秘するもの"として描かれているので、「人目」「人言」は恋の障害の表現としてだけ機能している。歌垣の場の愛情表現のやり取りにも、前述のように障害としての「噂」は登場するが、同時に、その場にいる見物人という他者を自分たちの恋愛を支援するものとして位置づける感覚のあるのが特徴である。実例をいくつか挙げよう。

〔34女〕もし（あなたが）私を捨てるのなら、私は行きたくないです

私の隣りにいる知り合いは証人となるのですから、言ったことは守ってください

私と一緒にいる女友達はみんな

私の選んだ結論を納得して許してくれると思います

（工藤・岡部『中国雲南省歌垣調査全記録1998』、歌垣Ⅱ）

〔10男〕妹よ、もう食べることについて言わないことにします
私たちは愛について話すことにして、食事についてはもう話さないことにしましょう
周りには見ているたくさんの人〔証人としての見物人〕がいますから、安心して私に随(つ)いて来ればいいのです
ほかの人は一緒になれるのに、なぜ私たちは一緒になれないのですか？　（同、歌垣Ⅵ）

〔49女①〕私と家庭を作る、と聞きました
私は跳び上がるほど嬉しかったです
恋人が若夫婦に変わります
本当に嬉しくてたまりません
ほかの人は愛し合って一緒に暮らしています
私たちも出会ったからには別れはしません
いつか私たち二人が別れるようなら
人々に（どちらが悪いかを）判断してもらいましょう　●この「人々」のなかには、この歌掛けの見物人も含まれている。見物人は、歌詞の善し悪しについての批評家であると同時に、この歌掛けで歌われた内容についての“証人”の役割も帯びている。
（工藤『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』、歌垣【A】）

〔112男〕よく答えてくれた“花と柳”（恋人）よ
私の大切な体はあなたに寄り掛かってもいいですか？
あなたの顔は赤くつややかで色白で、なんと美しいのでしょう
一番の美人はあなたです
千人いてもあなたほど美しい人はいないでしょう？
人々は皆、私の恋人はあなただと言っています　●人の噂を味方にしようとする表現。
私は言います、二人で一緒に掃りましょう
私の恋人はあなたです　（同、歌垣【A】）

〔7男〕愛しい妹のあなたに答えます
心配なのは愛情が長く続かないことです
心配なのは愛が実らないことです
私は眠ろうとしても穏やかに眠れません
噂を打ち破って結婚を実現させたいです
私たちは千人（たくさんの人）の口（噂）を封じましょう　●ここでの「人の噂」は、恋の障害という、『万葉集』と同じ位置づけになっている。
万が一結婚できなくても
たくさんの人に知られないようにしてほしいです
〔8女〕千人の口を封じる、と聞きました
愛し合うのは必ず長く続けるべきです
妹の私は生まれつき大人しい性格です

私は切ないほど想っています
人々が噂を立てても、私たちは仲良くし続けます
千人の口を封じましょう
私はこういうことをあなたに話しました
(私たちの愛は)必ず長く続きます
〔9男〕必ず長く続く、と聞きました
老いて死ぬまで愛し合って、仲良くします
今では若い人たちが親密になることを
妹のあなたは知らないのです
私たちは年を取るまで愛し合います
人々に知ってもらわなければなりません ●ここでは、「人々に知られること」が、恋の成就の支援になっている。
千人に言われても私は恐れません
あなたの兄の私は怒りません (同、歌垣【B】)

〔22女〕あなたはこれから喬後(チャオホウ)をぶらつく、と言いました
心配なのは兄のあなたの心変わりです
妹(私)はあなたから少し遠く離れています
なかなかあなたに優しくしてあげられません
愛し合うには心が誠実でなければなりません
あなたはぜひ心の内ではっきり覚えてください
いずれあなたが心変わりしたら
皆が(あなたが私を愛していたことを)証言します ●見物人が、"きょうの二人の愛の誓いの目撃証人になっているのだから、あなたは裏切れないですよ"というふうに、他人の目を"恋の保証"として用いる例。他人の目のこのような利用のし方は、『万葉集』にはない。 (同、歌垣【B】)

〔30男〕物笑いの種になるのが心配だ、とあなたは言いました
実は誰も私たちのことを笑っていません
千人もの人たちが私たちの親しさを見ています ●たくさんの人が目撃しているのだから、二人の結びつきは簡単に切ることはできないと、相手の心変わりを封じる。このように「人目」を、男女の結びつきを強化する方向で用いる例は『万葉集』にはない。
誰が反対なんてしましょうか?
あなたが愛しているのはどういう人ですか?
その人は言わなくても、あなたは知っています
ただあなたの夫が私を恨んでいるだけで ●あなたには「夫」がいる、と挑発。
ほかに(恨んでいる人は)誰もいません (同、歌垣【C】)

〔143男〕問題は本当か嘘かということです
あの人は録音をしています ●一般見物人の目を歌の中に取り込むのは普通のことであり、その延長線上に、録音・録画・写真撮影をしている私たち(工藤隆・工藤綾子)も取り込まれた。この歌垣の場合は、私が、施珍華

氏というこの地域での有名なペー族文化人に案内されていたこともあり、普通の見物人よりは少し価値の高い存在として見られていた可能性がある（ほかの歌垣では、その逆に、警戒され、嫌われる存在として扱われた経験もある）。

録音している以上は、続けて歌いましょう
私たちの縁組みのためになります
残念なのは私たちが上手に歌えないことです
皆に笑いものにされたらよくないです
私たち二人の歌は録音、録画されています
レンズは私たちに向いています　（同、歌垣【C】）

5男　それを聞いてとても喜んでいます。もしあなたの言ったとおりならとても嬉しいです。
あなたはまだお嫁に行っていなくて、私もまだ一人です。
私たちがカップルになれば、周りの人たちも喜びます。
私たちは一緒に座って、みんな（歌を聴いている人たちのことか？）と知り合いになれるでしょう。　（岡部「繞（めぐ）る歌掛け」）

186男　あなたの言葉はとてもよく聞こえます。私も牡丹の花を一輪取りたいです。
私が牡丹の花を取ってしまったらあなたは逃げられません。
あなたはまるで中庭に咲いているようです。もう逃げられません。
今日私が牡丹の花を一輪取ったということは、ここにいるみんなが知っていることです。
187女　ここにいる人はみんな知っています、あなたが一輪の花を取ったということを。
あなたが前を歩き私が後ろを歩くのはまるで花と葉のようです。
花と葉はいつも一緒で離れることはできません。　（同）

256女　兄よどうぞ安心して下さい。私のような人間は他の人はいらないです。
私は本当にあなたを愛しています。これは誰も知っています。
私はそんな人間です。私は言ったことは必ず守ります。
私はみんなの前でこう言ってますから、どうか安心して下さい。　（同）

以上のような、二人の関係を強固にする証人、二人の恋愛の支援者として他者を活用する表現は『万葉集』にはない。これは、万葉歌が歌垣のような無文字時代の〈声〉の現場性を失って、漢字文化導入後の〈文字〉の歌に傾斜していることを示している。また、国家・都市・宮廷が成立することによって歌のムラ共同体的性格に変質が生じ、歌垣歌のムラ段階社会での結婚成立のための実用的機能を失って、万葉恋歌では恋愛の極限は“反制度的な”ものだという、〈古代の近代〉的で観念的な恋愛観が支配的になったことを示している。それに対して歌垣の場は、逆に“制度に許容された愛情表現”を皆が確認する場だということになるだろう。結婚して子供を作り、安定した家庭を築き上げ、ムラ共同体の維持に貢献する“健全な”男女関係を、“制度に許容された愛情表現”として歌い上げるのが歌垣の現場なのである。

この歌垣歌の制度的性格は、先にも挙げた「……不特定多数の男女が配偶者や恋人を得るという実用的な目的のもとに集まり……」という私の歌垣定義に、「実用的な目的のもとに」という一節のあ

ることと呼応している。

5 「名」を問うことの二重性

このように、同じ表現が歌垣の現場性と万葉歌の観念性としての違いを浮かび上がらせる例として、さらに「名」を問う表現について触れよう。

『万葉集』の恋歌には「名」をめぐる駆け引きを歌うものがいくつかあるが、その中でも圧倒的に多いのは、たとえば次に引く歌のように「名」が表に出ることで“評判になる”ことを嫌うという用法である。

玉くしげ覆ふを安み開けていなば君が名はあれどわが名し惜しも（巻二相聞・93、鏡王女）

〔玉くしげのように人目にたっていないのをいいことに夜も明けてからお帰りになると、やがては人に知られます。あなたのお名前はともかく、私の浮き名の立つのは困ります。〕

わが名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立たば惜しみこそ泣け（巻四相聞・731、大伴坂上大嬢）

〔私の恋の評判は、いくら立ってもよいとして、あなたの浮名が立ちますと、くやしくて涙が出て来ます。〕

今しはし名の惜しけくもわれは無し妹によりては千たび立つとも（同・732、大伴家持）

〔今はもう名など惜しいと私は思いません。あなたとのことで千度も浮名が立とうとも。〕

これは、先に触れた「人目」「人言」と同じように、他人の目・噂を気にするという心情と同方向である。

これに対して、歌数は少ないが、たとえば次の4首のように、文字通りに自分や相手の「名」そのものを明かす、明かさないという、歌垣の現場的な歌がある。

籠もよ　み籠持ち　掘串もよ　み掘串持ち　この岳に　菜摘ます児　家聞かな　名告らさね　そらみつ　大和の国は　おしなべて　われこそ居れ　しきなべて　われこそ座せ　われこそは　告らめ　家をも名をも（巻一雑歌・1、雄略天皇）

〔……あなたはどこの家の娘か。名は何という。……わたしこそ明かそう。家がらも、我が名も〕

みさごゐる磯廻に生ふる名乗藻の名は告らしてよ親は知るとも（巻三雑歌・362、山部赤人）

〔みさごのいる磯に生える名乗藻のように、名をおっしゃってくれ、親に知れたとて。〕

紫は灰指すものそ海石榴市の八十の衢に逢へる児や誰（巻十二相聞往来歌・3101）

〔紫の染料は灰汁を入れるものよ。灰にする椿の、海石榴市の八十の辻に逢ったあなたは何という名か。〕

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか（同・3102）

〔たらちねの母が私を呼ぶ名を告げもしようか、さて道の行きずりのあなたを、どんな人と知って告げるのでしょう。〕

これら4首はいずれも、歌い手同士が音声で歌を交わし合っている歌垣的な場がイメージされる。特に、「紫は灰指すものそ……」と「たらちねの……」の2首には歌垣の現場の雰囲気が濃厚である。

これらの万葉歌は、歌垣の現場の記憶を残存させた貴重な歌である。

もちろん、このように、歌掛けの相手の「名」を聞き出そうとする歌詞は、ペー族の生きている歌垣においても大変に多い。少数民族の歌垣は、同族だが広範囲に散在している集落の人々が集まってきて行なわれることが多いので、相手のことを知らない者同士での歌垣になるのが普通である。したがって、「名」だけでなく居住している村や家族構成など、相手についての情報を互いに探り合う。このとき、最初のうちは本当の「名」、村名などを言わないのは、万葉歌と共通している。ペー族歌垣のいくつかの例を挙げよう。

〔63 男②〕きれいな花よ、私はその村の名前を聞いたこともありません
嘘の村の名前を教えるのは良くないことです
村の名前をはっきり教えてくれなければ、私は訪ねることもできないです
本当に私を愛していれば、その住所を教えてください
〔64 女〕私の名前は「李桂香（リグイシアン）」と言います
ぜひ来てください
私の名前を（人に）尋ねたらすぐわかります
私の名前を忘れないでくださいね　●翌 99 年 9 月にペー族歌垣の 5 度目の訪問をした際に施珍華氏に確認したところ、「李桂香（リグイシアン）」という名前は実在の人物名ではなく、「月里桂花」（月のなかの桂の花）という、ペー族のあいだでよく知られている恋愛歌曲の中の女主人公の名前が使われたのだろうということだった。参考資料として「月里桂花」の全文訳をこの 歌垣 II の最後に掲載したが、確かにその中の〔10 女〕の歌詞が「私の名は李桂香（リグイシアン）です」となっている。

とすると、次の〔65 男②〕が「その名前は前から聞いています」と答えたのは、彼もまたその歌曲を意識して、その中の男主人公を演じたことになるだろう。

〔65 男②〕その名前は前から聞いています　●同じ歌曲「月里桂花」の中で〔11 男〕も「その美しい名前は前から聞いていました」と歌っている。
刀は鞘（さや）の中で動いています
茶碗も籠の中で動いています　●なお、歌曲「月里桂花」の〔11 男〕は、「刀も心を動かして鞘の中で揺れ動き、お碗とお皿も心を動かして籠の中で互いにぶつかっています」と歌っているので、この男②がこの有名な歌曲の中の歌詞を意識しているのは間違いない。
〔66 女〕（この前の歌の訳と説明に手間取り、女の歌詞の訳が大部分落ちる）
あなたの気持ちはわかっています。私も同感です
〔67 男②〕李桂香という名前は前から聞いて知っていたので、探していました
きょうやっと出会いました
あなたの村に行ったことがありますが、あなたを見つけることはできませんでした
こんなところで会うことができて……（あと不明）

（工藤・岡部『中国雲南省歌垣調査全記録 1998』、歌垣 II）

〔9 女①〕兄（あなた）よ、あなたはどこに住んでいる人ですか？　●相手の住所を尋ねるのは、知らない者同士の歌垣の基本様式。実用目的であると同時に、歌垣を持続させるためのワザのひとつでもある。以下「基本様式」という用語は、このような意味で用いる。
なぜ山まで花を摘みにやって来たのですか？

一本の渓流と二つの山
二つの山はぴったりと寄り添っています
あなたの話し方は絹糸のよう(に柔らかく)
あなたの歩き方は一陣の風のよう(に速い)です
愛情も思いやりもある兄のあなたよ
どこの村に住んでいるのですか？　（工藤『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』、歌垣【A】）

中には、次のように、「私には名前はありません」などと、明らかな嘘で答える例さえある。

249男　あなたの村だけではまだ足りません。あなたの名前も教えてください。
名前を知らなければどうして人に尋ねることができますか。
恋愛の時は本当のことを言わなければいけないのです。
今あなたの名前を教えてくれませんか。
250女　あなたに言っても信じてもらえないかも知れませんが、私には名前はありません。
私は名前のない娘です。あなたは知っていますか。
みんな名前を持っていますが、ただ私だけ名前がないのです。
私は名前はありません。私の顔さえ覚えればいいのです。　（岡部「繞(めぐ)る歌掛け」）

しかし、現場での歌垣で重要なのは、次のような相手の「名」を尋ねる表現が、歌垣そのものを持続させるための技術としても用いられている点である。

〔14男〕あなたの兄（私）があなた（妹）を探す、と聞きました
あなたを見つけるのは本当に難しいです
私は尋ねます、あなたの苗字と名前は何ですか？　●名前を尋ねるのは、住所を尋ねるのと同じく、知らない者同士の歌掛けでは最も基本的な様式である。
あなたと何首か歌いましょうか？
あそこ(の歌競べ台での歌競べ)に申し込んでいる人が多いです
後で満員になると申し込めないですよ
私は尋ねます、あなたの苗字と名前は何ですか？
申し込んで（歌競べに）行きませんか？
（工藤『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』、歌垣【C】）

この歌垣【C】は、6時間弱にわたって、848首（1首は、七七七五＋七七七五の52音）の歌を掛け合った歌垣である。これだけ長くなると、時々うまく歌い継げなくなったり、話題に詰まって途切れそうになることがあるのだが、そのようなときにこの「名」を尋ねる歌詞を出せば、必ずなんらかの返事が返ってくるので、そのやり取りをしているうちに互いに次の展開が見えてきて、歌垣は継続するのである。これは、相手に配偶者（妻あるいは夫）がいるのではないかと疑う歌詞の場合も同じで、この表現も何度も繰り返される。これらの、「名」や配偶者の有無を問う表現は、表の意味はまさにその通りの意味なのだが、一方で、歌垣を持続させるために用いられる歌のワザという現場ならではの側面があるのである。このような、現場の歌垣での歌詞の意味や役割の二重性（あるいは多

重性）は、文字資料としての『万葉集』だけをどれほど読み込んで想像しても、けっしてわからない。

現場の歌垣では、多くの見物人がその場にいるという〈公開性〉、「配偶者や恋人を得る」という〈実用性〉、そして、その場での歌垣をできるかぎり長く続けようとする〈持続性〉があるのだが、これらが万葉歌では欠落しているのである。

もちろん、〈公開性〉の点で言えば、『万葉集』という歌集に収録されたのだから、万葉の恋歌にもそれなりの〈公開性〉はあったことになる。しかし、万葉恋歌は、歌垣歌の配偶者選びの〈実用性〉をいちじるしく薄めた分だけ、観念性を強めて〈文学性〉への傾斜を強めているのである。

6　歌垣と万葉宴席の違い

ただし万葉歌にも、宴席という〈公開性〉そのものの場で詠まれた歌がある。しかし、歌垣の現場と万葉宴席の決定的な違いは、私の歌垣定義のうちの「不特定多数の男女」、「配偶者や恋人を得るという実用的な目的のもとに集まり」、「メロディーに乗せて」という部分のある無しにある。「メロディーに乗せて」という点では、万葉宴席でも声に乗せて歌い上げたという可能性はあるが、しかし前提としてすでに〈文字の歌〉が支配的になっていたので、無文字文化の中の〈声の歌〉としての歌垣歌とは違う。

また、万葉歌に見られる宴席・遊宴は、基本的にヤマト国家の中枢部に所属し都市と宮廷社会に染まっている官僚知識人の集まりである。そこでは、前もって名前、身分の差、家柄などが知られているがゆえに、その場は“世俗の秩序”によって覆われている。それに対して、未知の者同士の交流を原則とするムラ段階社会の現場の歌垣では、世俗の秩序は約束ごととして消されている。そこでは、多くの場合何らかの神話世界を起源に持つ非日常的秩序が優先され、歌を交わす当事者同士は対等な存在として歌詞を紡ぎ出すのである。

すでに述べてきたように、『万葉集』の宴席歌でも、その場にいる人々を“証人、恋の支援者としての他者”として扱っている例は皆無である。ただし、佐佐木幸綱は次の２首を「結婚宣言の歌」と想定している[6]。「結婚宣言の歌」は、私流に言えばその場にいる人々を“証人、恋の支援者”として利用して、自分たちの結婚を実現させようとする歌である。

多麻川に曝す手作さらさらに何そこの児のここだ愛しき（巻十四東歌・3373）

〔多摩川に曝す手作りの布のように、さらにさらにどうしてこの娘がこれほどいとしいのだろう。〕

上野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ（巻十四東歌・3404）

〔上野の安蘇の麻束を抱きかかえて寝るのに満足しない。私はどうしたらよいのか。〕

しかしこれは、ヤマト国家中央部の平城京や宮廷とは別世界の、辺境東国の庶民の歌である。東国筑波山には、大規模な歌垣の集いが700年代まで生きていたことが『常陸国風土記』『万葉集』から推測される。したがってこの２首は、宴席的な歌だとしても、平城京の宮廷的な宴席ではなく、ムラ社会的な歌垣的雰囲気を背負った庶民の宴席だったのだろう。私が中国辺境で行なった現地調査のときでも、歌垣が生きている地域での宴席（たとえば私という外国人を歓迎するための宴席）では、しばしば歌垣的な即興の歌が登場した（私には返す歌がないし現地語もわからないので、日本唱歌の「さくら」などを歌って許してもらったが）。

筑波山の歌垣には、『常陸国風土記』によれば、（静岡・神奈川両県境にある足柄の）坂より東の国々の男女が、春の花の開くとき、秋の紅葉のときに、連れ立って、飲食物を持ち、馬や徒歩で登り、楽しみ遊び、記録しきれないほど多くの歌が交わされたという。そして、「俗の諺にいはく、筑波峯の会に娉の財を得ざれば、児女とせずといへり」とあるように、この歌垣には「不特定多数の男女」が「配偶者や恋人を得るという実用的な目的のもとに集まり」という雰囲気が濃厚に漂っていた。

また、『万葉集』の高橋虫麻呂「筑波嶺に登りて嬥歌会をせし日に作れる歌」（巻九雑歌・1759）には、「未通女壮士の　行き集ひ　かがふ嬥歌に　人妻に　吾も交らむ　わが妻に　他も言問へ」（若い男女が集まり、歌を掛け合う歌垣で、他人の妻に私も声を掛けて付き合おう、私の妻に他人も声を掛けなさい）とあり、これも「不特定多数の男女」、「配偶者や恋人を得るという実用的な目的」いう点でまさにムラ段階の歌垣だとしていいだろう。

繰り返すが、万葉歌の中心は、漢字文化導入後の〈文字の歌〉、国家・都市・宮廷的な〈古代の近代〉の歌の集積である。しかし、ムラ段階社会の、無文字時代の〈声の歌〉のある部分は捨て去られたが、それら万葉歌に、たとえば恋愛の諸局面の共通性の存在に示されるようなある部分は継承された。中国少数民族など歌垣文化圏の現場の歌垣資料を動員してそういった古層の表現と新層の表現の区別づけをすることが、〈古代の近代〉期の作品としての『万葉集』の性格の明確化に貢献するだろう。

注

(1) 以下のペー族歌垣の歌詞の引用は、工藤隆・岡部隆志『中国少数民族歌垣調査全記録 1998』（大修館書店、2000年）、工藤隆『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』（勉誠出版、2006年）、岡部隆志「繞る歌掛け」（『共立女子短期大学文科紀要 49』2006年）による。

(2) 詳しくは、工藤隆『中国少数民族と日本文化―古代文学の古層を探る』（勉誠出版、2002年）の「第二章　歌垣の現場からの歌垣像」を参照して欲しい。

(3) たとえば、辰巳正明の『詩の起原―東アジア文化圏の恋愛詩』笠間書院、2000年、そのほかの一連の仕事。

(4) 以下万葉歌の引用は、中西進『万葉集』（講談社文庫）による（現代語訳の一部に手を加えたものがある）。

(5) 古橋信孝『古代の恋愛生活―万葉集の恋歌を読む』ＮＨＫブックス、1987年

(6) 佐佐木幸綱『万葉集の〈われ〉』角川選書、2007年